

上峰町文化財調査報告書第10集

坊所城跡

日山不動産株式会社による宅地造成工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1992年2月

上峰町教育委員会

上峰町文化財調査報告書第10集

ぼう

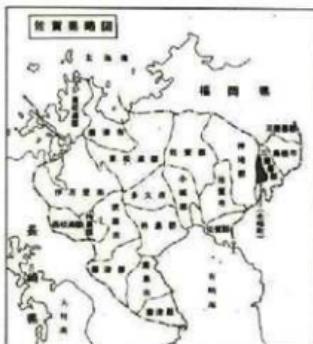
じょ

じょう

あと

坊 所 城 跡

日山不動産株式会社による宅地造成工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



1992年2月

上峰町教育委員会

序

從来より、上峰町は、遺跡の宝庫と言わされてきました。北部の脊振山系、その南麓から派生する南北に延びる洪積世丘陵、さらに有明海へと続く沖積平野と変化にとんだ地形には、いたるところに古くから人々が暮らしてきた様々な足跡が刻み込まれています。

町では、こうした人々の暮らしの足跡、歴史的資産を保存・活用し、将来へ継承していくために、開発と文化財の保護との調整を図ってまいりました。

町の中央を国道34号線が横断し、ここから福岡県久留米市へは県道が通るという恵まれた交通環境に位置している上峰町は、佐賀市や鳥栖市、また久留米市へも10km前後の最適な通勤圏にあるところから、近年人口も着実に伸び、ベットタウンとして注目を集め、年々大型の宅地開発計画が増加しています。とくに町中央の坊所地区は、町役場、郵便局、学校などの公的施設が集中しており、この傾向が一層顕著であり、昔ながらの農村風景は変貌しつつあります。

このたび、坊所地区における分譲住宅建設に先立ち、坊所城跡の発掘調査を実施しました。坊所城は、ある意味では現在の上峰町の礎とも言える中世の城館遺跡で、調査の結果、土壘や濠、建物や井戸などが当時の遺物とともに確認され、貴重な資料を得ることができました。

ここに報告書を刊行し、この成果を永久に保存するとともに、本書を学術資料として、また、文化財の保存、活用の資料として役立てていただければ幸いです。

なお、このたびの発掘調査にあたって、ご協力、ご指導頂いた地権者、日山不動産株式会社、県教育委員会文化財課はじめ、関係各位に深く感謝申し上げます。

平成4年2月

上峰町教育委員会

教育長 松田末治

例　　言

1. 本書は、日山不動産株式会社による宅地造成工事に先立ち、上峰町教育委員会が発掘調査を実施した、佐賀県三養基郡上峰町大字坊所字櫻寺に所在する坊所城跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、日山不動産株式会社の委託を受けて、上峰町教育委員会が主体となり実施した。
3. 現地での発掘調査は、平成3年8月13日から同9月25日まで行い、その後、船石文化財整理事務所にて引き続き整理作業を行った。
4. 遺構の実測は、調査員及び実測作業員が行った。
5. 遺構の写真撮影は、原田が行い、一部空中写真を有限会社空中写真企画に委託した。
6. 遺物の実測・トレースは、調査員の指導で実測作業員が行った。
7. 本書の執筆、編集は原田が行った。
8. 本遺跡の出土遺物、図面・写真等の記録類は上峰町教育委員会で保管している。
9. 今回の発掘調査から整理作業にいたる過程で、次の方々や機関からご協力、ご助言を賜った。厚くお礼申しあげます。(敬称略、順不同)

日山不動産株式会社、中山 熟、西原 健、古賀宅建不動産、佐賀県教育委員会文化財課

凡　　例

1. 本遺跡の略号は、「BJJ」とした。
2. 遺構番号は発掘調査当時のままとした。
3. 遺構番号に冠した2文字のアルファベットは、遺構の種別を表す。内容は以下の通りである。
S B……掘建柱建物址 S D……溝及び溝状遺構 S E……井戸 S K……土壙
4. 掘図中、既成の地形図を用いたものは図上方が座標北を、その他の遺構配置図、遺構実測図などの方位は磁北を基準としている。
5. 各掘図の縮尺は、遺構実測図中の土壙断面図が1/100、掘建柱建物址・溝が1/80、井戸・土壙が1/60である。また遺物実測図は、遺物番号2の1/8を除き、1/4である。
6. 遺構実測図中の標高は、10.00mに統一している。
7. 出土遺物実測図中の遺物に付した番号と写真図版中の番号は一致する。

目 次

序

例言・凡例

調査参加者

1. 調査の経過	1
2. 位置と環境	3
3. 遺 跡	4
4. 遺 構	5
5. 遺 物	10
6. ま と め	14

挿 図 目 次

Fig. 1 遺跡位置図	3
Fig. 2 遺跡周辺地形図	4
Fig. 3 調査区地形図及び遺構配置図	6
Fig. 4 遺構実測図(1)	7
Fig. 5 遺構実測図(2)	8
Fig. 6 遺構実測図(3)	9
Fig. 7 出土遺物実測図(1)	11
Fig. 8 出土遺物実測図(2)	12
Fig. 9 出土遺物実測図(3)	13

図 版 目 次

PL. 1 遺跡全景, 土壘, 土壘断面
PL. 2 道路部分遺構写真
PL. 3 水田部分全景, SK-105, SE-117
PL. 4 出土遺物写真(1)
PL. 5 出土遺物写真(2)

調査参加者

発掘作業参加者

石橋テル、石丸ミチエ、江崎晃子、大坪光代、緒方ツタエ、川原ツヤ、川原ミヨ、鳴山静江、
高島昇、田中巧、堤イシ、鶴田末友、鶴田八重子、納富ヌイ子、松尾キミエ、松尾ト
シエ、和佐治夫

整理作業参加者

島美保子、中尾美千恵、馬原喜美子

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

平成3年4月18日、日山不動産株式会社より上峰町教育委員会へ、上峰町大字坊所字櫻寺における建売分譲住宅建設計画に伴う埋蔵文化財の有無およびその取扱についての照会が提出された。

町教育委員会では、照会があった開発が周知の埋蔵文化財包蔵地内の開発であることから、事前の確認調査を実施することで関係者と協議を行った。

確認調査は、宅地造成部分（現状、水田）、宅地への取り付け道路部分（現状、竹藪）についての二回に分けて実施した。宅地造成部分の確認調査は、平成3年5月28・30日の2日間で行った。その結果、溝、建物跡、土壌などの遺構が検出された。また、取り付け道路部分については、中世城館に伴う土塁を横切る形で設計されていたので、土塁の遺存状態の比較的良くない位置への計画変更を開発側に要請したが、今後の土地利用から計画変更是できないとの回答がなされた。そこで、竹の伐採を待って道路部分確認調査を実施することとした。

道路部分の確認調査は、7月10日から22日までの5.5日間行った。先ず、土塁及び後背地について現状の地形測量を実施し、その後試掘を行った。その結果、土塁は中世のものと判明し、あわせて中世の溝、古墳時代の土壌、近世の溝などが検出された。

この二回の確認調査の結果をふまえ、開発側、県文化財課、町教育委員会の三者で今後の文化財の取扱について協議を行い、道路部分を中心に記録保存を目的に約700m²について本調査を実施することとなった。

(2) 調査組織

調査事務局	総括	松田 末治	上峰町教育委員会	教育長
	事務主任	馬場 英孝	〃	教育課長
	経費執行	吉田 忠	〃	社会教育係長
	〃	原田 大介	〃	社会教育係員
	〃	鶴田 浩二	〃	〃
調査組織	調査担当	原田 大介	〃	社会教育係員
	〃	鶴田 浩二	〃	〃
調査指導	佐賀県教育委員会文化財課指導係			

(3) 調査の経過

確認調査の結果を受けて、平成3年8月13日から9月25日まで本調査を実施した。以下、簡単にその経過を記す。

8月13日 道路部分から重機による表土剥ぎを開始し、本調査に着手する。

8月14日～18日 旧盆のため作業休止。

8月19日～21日 重機による表土剥ぎを引き続き行う。

8月23日 発掘器材類準備。

8月26日 発掘器材類準備搬入後、遺構検出作業に着手する。土壌の土層断面実測作業、遺構実測用測量基準杭の打設（28日まで）も併せて行った。

8月27日～9月13日 遺構検出作業、掘り下げ作業、遺構実測を進める。土壌に伴う溝、建物跡、井戸など中世の遺構をはじめ、近世の溝、甕などが次々と検出される。しかし、作業員が少なく、作業が遅れ気味となる。

9月6日 9月に入り、作業員の不足から、作業の遅滞が深刻化し、10日間の調査期間の延長を申し入れ、協力を要請した。

9月14日 台風17号が佐賀県を直撃。調査区が雨水に没し、調査不能の状態となった。また、船石の町文化財整理事務所が倒壊寸前の状態となり、同事務所に収蔵していた遺物・記録・備品類の旧庁舎への緊急移転作業で18日まで調査を中断した。

9月19日 調査区内に溜まった雨水を汲み上げながら作業を再開した。中止前に着手していた宅地部分の溝の掘り下げ作業を再開したが湧き水がひどく、掘り下げ困難となり一部を発掘したにとどまった。また、宅地部分の他の遺構についても、期間・費用の問題で掘り下げを断念し平面を確認・記録するにとどめた。

9月20日 全体写真撮影のための清掃作業を行う。作業員不足のため、他の調査に従事している作業員の応援を請うた。

9月21日 空中写真撮影を行う。

9月22日～25日 遺構実測、遺構の個別写真撮影などの諸記録作業を行う。

9月25日 現場でのすべての作業を終了し、発掘器材類、出土遺物類の搬出を行う。作業終了後、日山不動産株式会社へ、電話と同日付けの文書で調査終了、現場引き渡しの旨の連絡を行う。

現場作業に引き続き、旧庁舎にて出土遺物の水洗い作業を行った。以後、整理作業を公民館、船石文化財整理事務所にて実施した。

2. 位置と環境

本遺跡の所在する上峰町は、三養基郡の西端、佐賀平野のほぼ中央に位置し、東は中原町、北茂安町、南は三根町、西は神埼郡東脊振村、三田川町と境を接している。本町の町域は、南北に細長く、北部の脊振山系、その南麓に派生する洪積世丘陵を経て、南の有明海に続く沖積平野と変化にとんだ地形を含んでいる。

北部の鎮西山頂には中世の山城が位置し、同山山麓周辺には古墳時代後期の群集墳が点在している。洪積世丘陵上には、各時代の集落や墳墓からなる遺跡が密集し、特に、二塚山遺跡、切通遺跡など弥生時代の著名な遺跡が多く知られている。南部の沖積地には、古代の条里遺構、中世の城館址、環濠集落址が点在している。

本遺跡が立地する坊所丘陵（標高8～10m）は、目連原丘陵東側の支丘で弥生時代から中世にかけての遺跡が位置している。また、この丘陵南東部の沖積地には、江迎、加茂、前牟田、米多の中世城館址や集落址が分布している。

上峰町遺跡地名表

1 矢の院古墳群	24 船石南邊跡	47 西峰遺跡
2 塙西山（マカイ）山城	25 堤遺跡	48 塙の塙廃寺
3 古城山山城	26 二塚山遺跡	49 小坊所遺跡
4 二本柳古墳群	27 五本谷遺跡	50 北鼎遺跡
5 塙西山南麓古墳群	28 堤埴輪窑跡	51 四前八坂遺跡
6 堤一本黒木遺跡A	29 莪山遺跡	52 西前牟田遺跡
7 堤一本黒木遺跡B	30 四本谷遺跡	53 上米多貝塙
8 堤三本松遺跡	31 切通遺跡	54 寺家遺跡
9 屋形原古墳群	32 坊所一本谷遺跡	55 米多城跡
10 堤五本松遺跡	33 一本谷遺跡	56 前牟田遺跡
11 谷渡遺跡	34 井手口遺跡	57 加茂埋聚落跡
12 谷渡古墳群	35 外記遺跡	58 江迎城跡
13 堤三本柳遺跡	36 大坂遺跡	59 一ノ瀬聚落跡
14 青柳古墳群	37 坊所二本谷遺跡	60 目連原古墳群
15 新立古墳群	38 坊所五本谷遺跡	61 くずれ塙古墳
16 屋形原遺跡	39 坊所八本谷遺跡	62 無名塙古墳
17 堤六本谷遺跡	40 坊所城跡	63 上のびゆう塙
18 堤上墨跡	41 墓寺遺跡	64 大塚古墳
19 八軒遺跡	42 杉寺遺跡	65 古稱荷塙古墳
20 船石遺跡	43 坊所二本松遺跡	66 稲荷塙古墳
21 上地遺跡	44 坊所三本松遺跡	67 条理遺構
22 船石四本杉遺跡	45 三上遺跡	
23 船石工業団地遺跡	46 米多伝承地	



Fig. 1 遺跡位置図 (1/75,000)

3. 遺 跡

坊所城跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字坊所字櫻寺に所在する中世城館址である。

坊所城跡が位置する坊所丘陵は町中南部にあり、西に隣接する三田川町にまたがる目達原丘陵から東へ派生した標高7~10mの洪積世丘陵である。坊所城は、この丘陵の中央やや北の標高9m付近を城域としている。

城域は、Fig. 2 にスクリーンをかけた部分が推定されており、南北約260m、東西約300mを測り、長方形の南西隅約100m四方を欠いたカギ形を呈している。

現在、城域の北辺は町道沿線の宅地として開かれており土壘等の遺構は確認できない。

これに対し西辺は、町道東側に沿って高さ約2mの土壘が遺存し、その内側には空濠で区画された平坦面が認められる。土壘その他の施設は、戦時に目達原に作られた陸軍飛行場の飛行機掩体壕などのために一部が破壊されているものの比較的良好な状態で遺存している。

西辺から東に曲がるカギ形の部分には、幅約10m、高さ2m弱の二重の土壘が部分的に遺存している。今回の調査は、この土壘と後背地を対象として実施した。

城域の南部、東部は宅地化が進み、不明な点が多い。東部については現在町道が南北に走る線に以前まで濠割が遺存し、この線に城の内郭・外郭の境界があったものと推定され、この道路の西側畠地内には、南北50m、東西40m方形の基壙状の高まりや、空濠が残っている。

坊所城は坊所氏の居城で、龍造寺時代(16世紀後半)に坊所氏を称した。池田義幸は350町の知行をもっていたといわれ、相当の家臣団をかかえていたものと考えられている。『佐賀県遺跡地図』で坊所城跡の周囲に中世の集落跡として櫻寺遺跡が登録されている。今後この地域の発掘調査例が増加すれば、中世の城館を中心とした集落のあり方が明らかにできる貴重な遺跡である。



Fig. 2 遺跡周辺地形図(1/10,000)

4. 遺構

今回の調査で検出され遺構は、古墳時代後期の円形土壙 1基、中世城館に伴う土塁、溝、掘立柱建物址棟、井戸のほか近世の土壙、溝などが検出された。

(1) 土壙 (Fig. 3・4, PL. 1)

調査区南端部を東西に横断する土壙は、現在延長約30mが遺存している。南北それぞれ幅約5mの土壙が平行して走る二重の土壙で基部の幅約10m、高さ約1.5mを測る。土層観察の結果、土壙間の凹部は地山まで掘り込んでいたこと (SD-101)、調査区西側で南北の土壙の間の凹部がなく一本となっているがこれは後世の盛土で埋められたことが確認された。この土壙の北側に接して、内堀として幅約2m、深さ約0.8mのU字溝 (SD-102) が設けられている。

(2) 掘立柱建物址 (Fig. 4・5, PL. 2)

棟が確認された。いずれも南北、東西を軸としている。柱穴に伴う遺物がなく、時期が明確にできないが、現状で確認できる城域の他の土壙、空濠などの遺構の軸と合致するところから、中世のものと推定される。SB-103の柱穴の一つでは径10cm程の柱痕跡が確認できた。また、SB-133は、中間の柱4本を戦後の瓦土採掘のために失っている。

(3) 溝 (Fig. 5, PL. 2)

中世の溝は、SD-101, SD-102, SD-129, SD-130の4条が検出された。SD-101, SD-102は土壙に付属するもの。SD-129, SD-130は、その規模から空濠などの区画溝と考えられる。SD-129は、一部を発掘したが、深さ約0.8mのU字溝と思われる。一方、SD-107, SD-121に代表される細く浅い溝は近世のもので、18世紀後半代の陶磁器罐が出土している。

(4) 井戸 (Fig. 6, PL. 3)

井戸は2基が検出された。いずれも素掘りの井戸で石組みなどはみられない。SE-117は、直径2m程でほぼ垂直に掘り下げられている。SE-125は、上部を近世の土壙 (SK-126, SK-127など)に切られているが二段掘りの井戸のようで上部を直径約3mで約0.8m掘り下げた穴の中央に直径1.8mの掘り込みをもつ。

(5) 土壙 (Fig. 6, PL. 3)

土壙は、16基が検出された。古墳時代後期のSK-105を除くと、発掘したものはほとんどが近世の所産である。SK-115, SK-116, SK-118のような不整形を呈し掘り込みが浅いもの、SK-111, SK-114, SK-127のような掘り込みの中央に陶器の大型壺を正置したもの、SK-124, SK-126のような方形のものがある。発掘はできなかったがSK-136からは確認面から鉄鑄唐津皿、京焼き風陶器碗が出土している。SK-105は、直径約2m、深さ約0.7mの二段掘りされた円形土壙で、土師器壺形土器や須恵器高台坏片などが出土している。

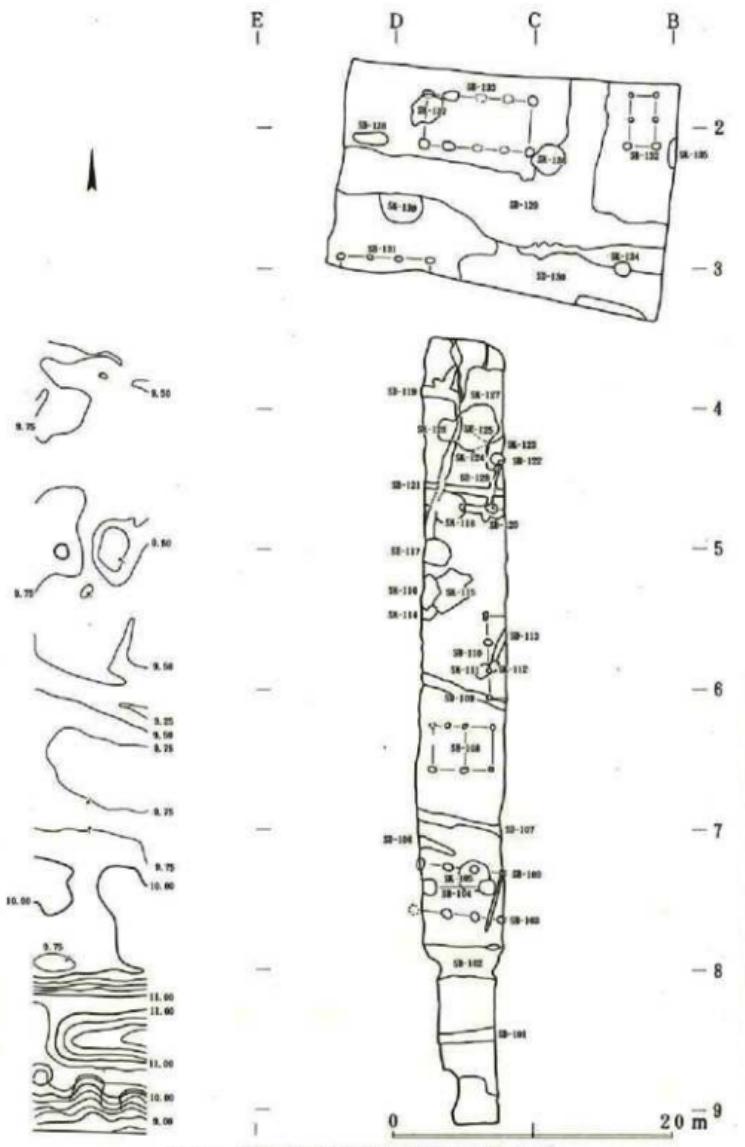
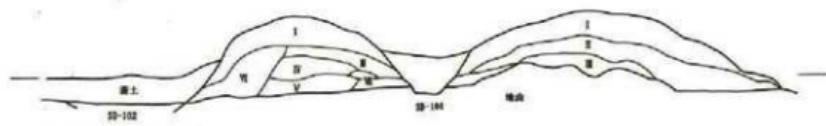
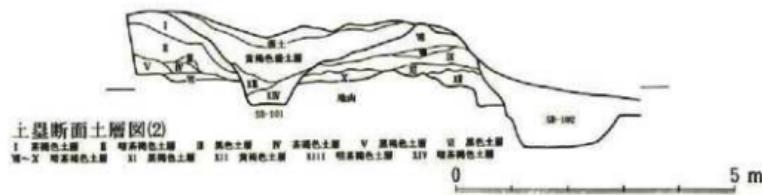


Fig. 3 調査区地形図(左)及び造構配置図(1/400)



土壤断面土层(1)

I 黑褐色土层 II 灰褐色土层 III 带黄褐色沙质土层
V 可变褐色沙质土层 VI 黑色土层 VII 带灰褐色土层



土壤断面土层(2)

I 黑褐色土层 II 灰褐色土层 III 黄褐色土层 IV 带黄褐色沙质土层 V 带黄褐色沙质之基
VI 黑色土层 VII 带灰褐色土层 VIII 带深灰色土层 IX 黑褐色土层 X 黄褐色土层 XI 黄褐色土层

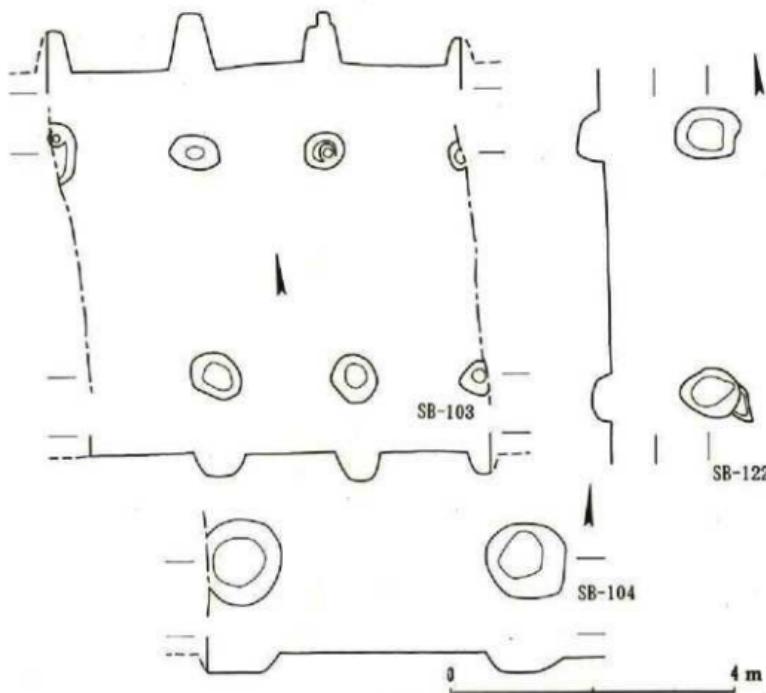


Fig. 4 造構実測図(1)

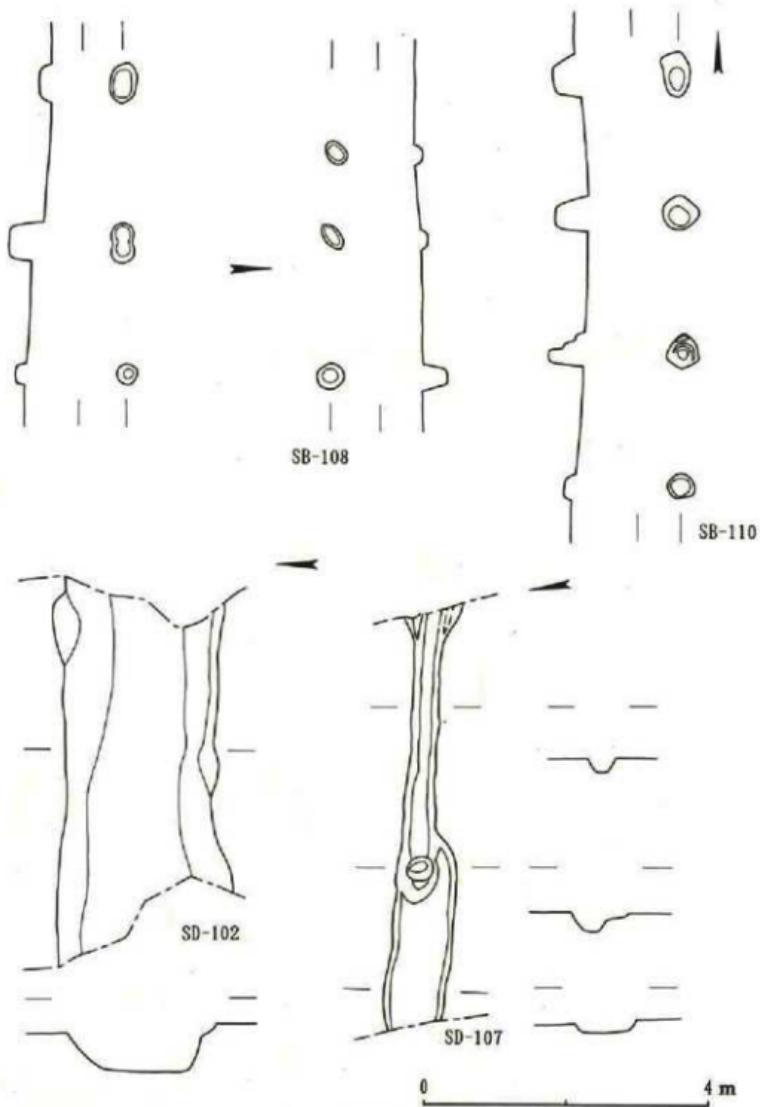


Fig. 5 遺構実測図(2)

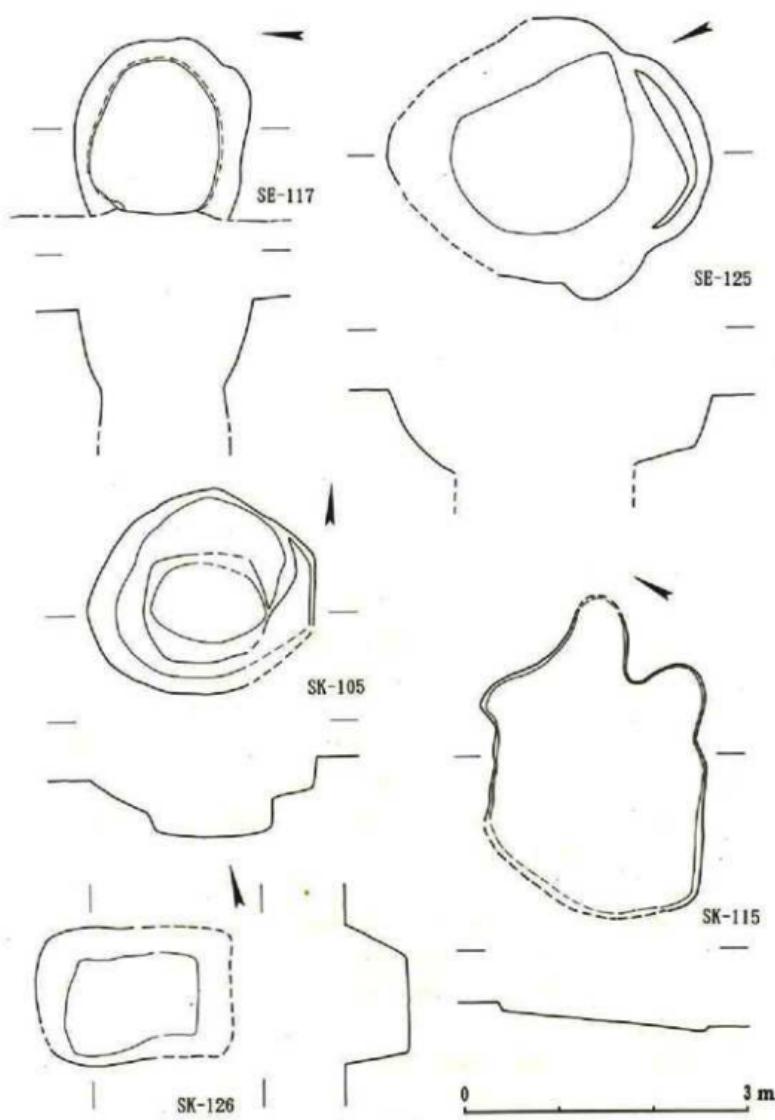


Fig. 6 造構実測図(3)

5. 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、土師器、須恵器、中世土器、舶載磁器、近世陶磁器などで、その他の遺物としては土鉢が1点出土しているものの鉄製品、石製品は出土していない。

また、道路部分の表土剥ぎ作業中に、近世の陶磁器片に混じり、須恵器壊の破片がかなり出土したことは注目される。

1は、SK-105出土の土師器の壺形土器で、口径24.6cm、遺存部高9.8cm。胎土は粗く暗赤褐色を呈す。口縁部はヨコナデ。内面には下から上へ粗いヘラケズリが施されている。

2～5はSD-102出土の土器である。2は、土鍋で推定径54cm、胎土は黄褐色を呈し内外面ともに粗いハケ目が施されている。外面に煤が付着している。3は素焼きの広口壺で、口径13.0cm、灰褐色を呈す。4は土鍋で口径30.0cm、灰褐色を呈し、内外面共にハケ目が施されている。つるを通す小穴をもち火除けのつばが付き、外面には煤が付着している。5は羽釜で羽の部分の直径は25.5cm、暗黄褐色を呈し、外面下部には煤が付着している。

6～12はSD-107出土の近世陶磁器類である。6・7は染め付けの磁器、8は唐津の鉢、9は素焼きの土鉢、10～12は火鉢などの瓦器である。

13・14はSK-105出土の陶器である。13は白土がけの大皿。14は二次焼成をうけた壺で肩に鉄輪が施されている。

15～17はSE-117出土の土器である。15・16は、板状の瓦質土器の角の部分でいずれもハケ目が施されており、暗灰色を呈す。15は端部が肥厚し、器壁がやや弯曲しているが、16はほぼ平面である。17は素焼きのかわらけで、口径9.8cm、底径6.2cm、器高3.1cm。胎土は明灰褐色を呈し、底部に回転糸切り痕を残す。

18～24はSD-129出土の土器である。18～22は土鍋。18は推定口径41cm、胎土は赤褐色を呈し、内外面共に粗いナデが施され、貼り付け口縁をもつ。外面に煤が付着している。19～21は胎土が灰褐色を呈し緻密な土で、焼成は良好である。19・20は外面ナデ、内面ハケ目が施され、21は内外面共にハケ目が施されている。口径はそれぞれ推定値で37.4cm、43.0cm、36.3cmを測る。22は口縁部をつまみ、小さな注ぎ口を作りだしており、注ぎ口にはつまむ際の指頭圧痕が残る。胎土は暗灰色を呈し、推定口径は35.0cm。23は素焼きの擂鉢の底部で内面に太い櫛目が一部遺存する。推定底径14.0cm、胎土は赤褐色を呈し、外面にはハケ目が施されている。24は素焼きの皿で、見込みに3本を単位とする櫛状工具による曲線文が施されている。焼成は不良で胎土は明黄褐色を呈す。

25・26は、16世紀後半の中国製舶載磁器で青花である。いずれも見込みに花鳥文をもつ皿の破片である。25は底部片で、胎土はややくすんだ白色を呈し、高台には粗い砂が溶着している。26は口縁部片で胎土は25よりやや白い。それぞれSE-125、SD-129より出土している。

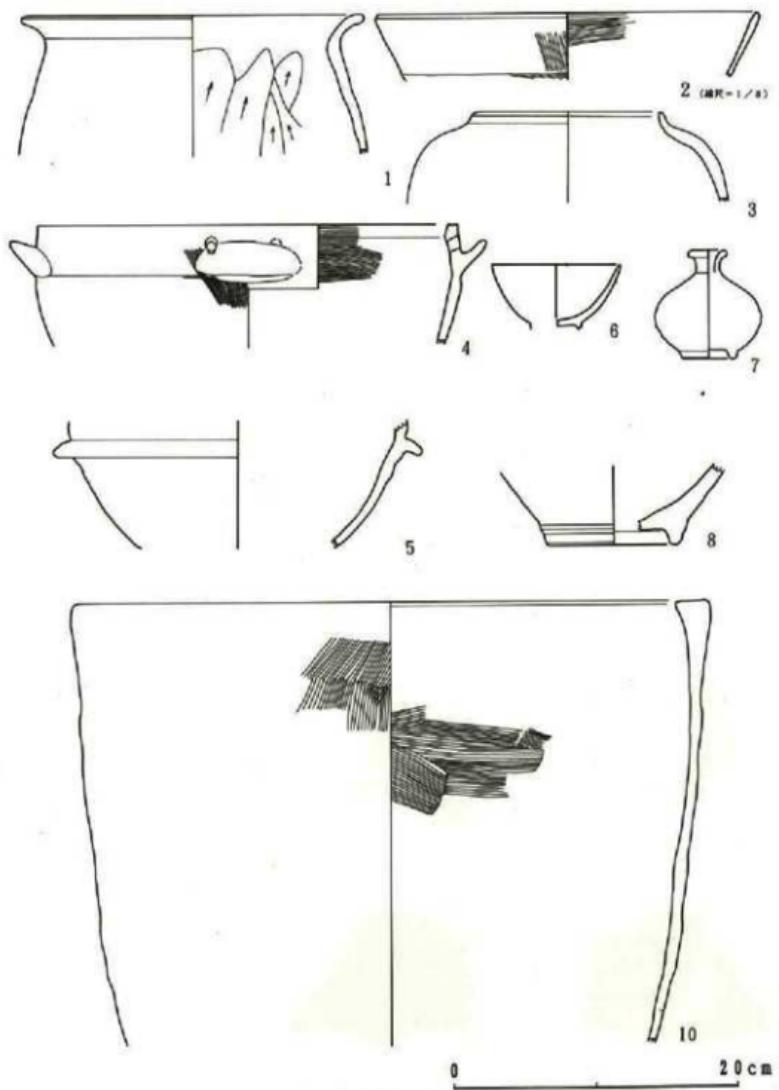


Fig. 7 出土遺物実測図(1)

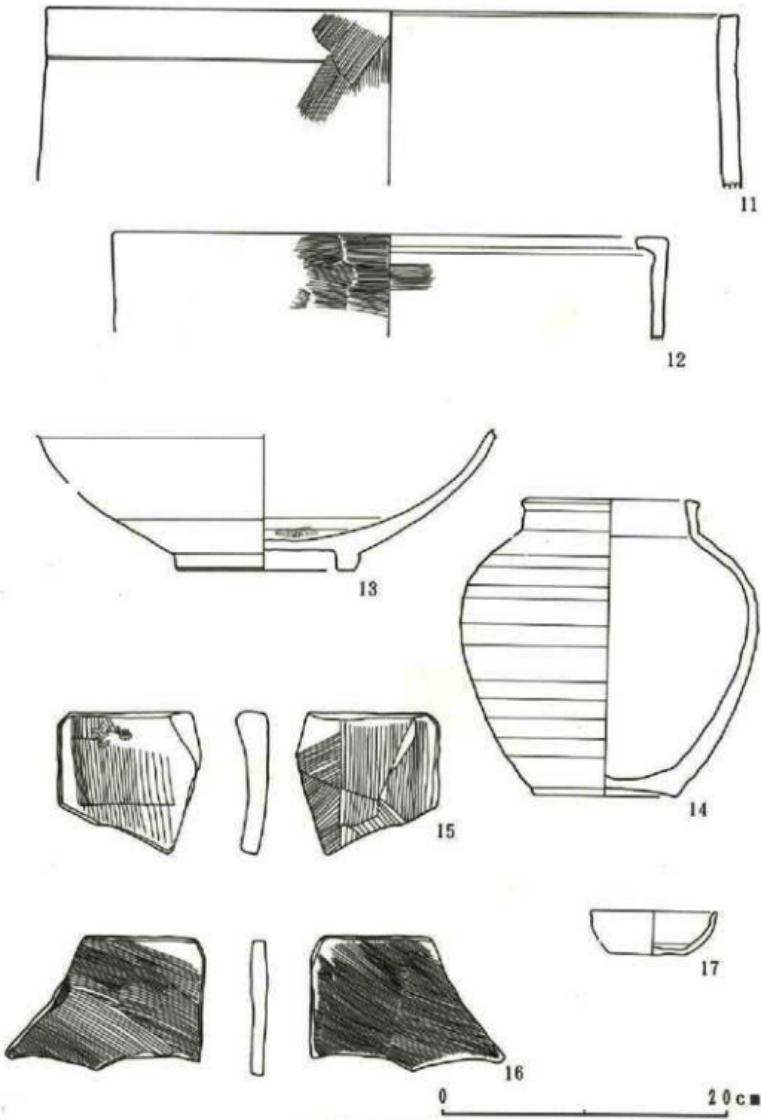
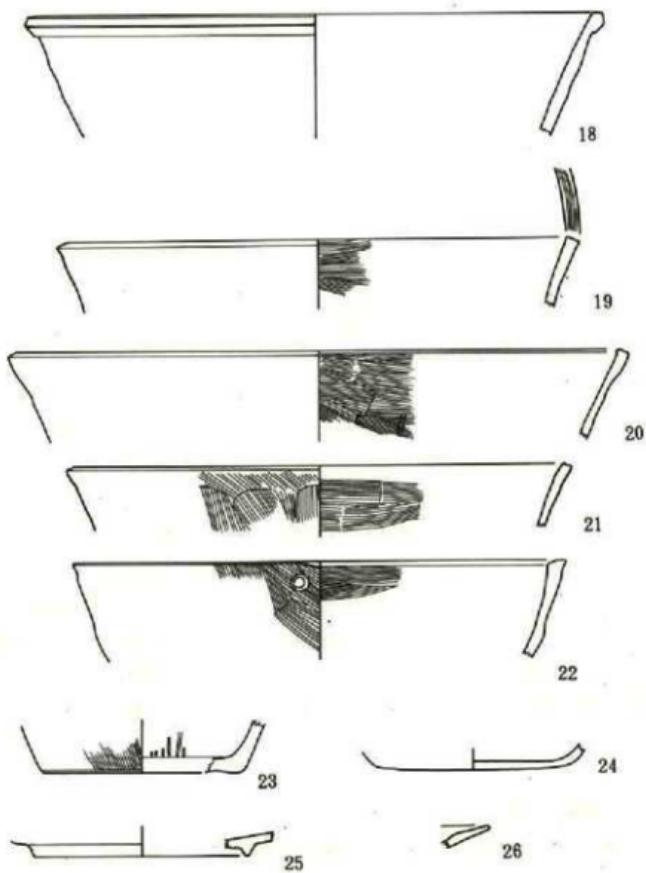


Fig. 8 出土遺物実測図(2)



0 20 cm

Fig. 9 出土遺物実測図(3)

6. まとめ

今回の調査は、平成3年8月13日から9月25日までの実質一か月の調査であった。これに加えて、作業員の不足、台風の襲来などで日程的に厳しいものとなり、遺跡の記録保存という観点からすれば、かなりの悔いを残してしまった。しかし、坊所城跡の推定面積約70,000mの約1パーセントにしか過ぎない今回の調査で、中世坊所城の施設と考えられる土壘をはじめ掘建柱建物址8棟、井戸2基などが検出され、これに伴い中世の土器、鉢載磁器などの遺物を得ることができたことは幸いであった。

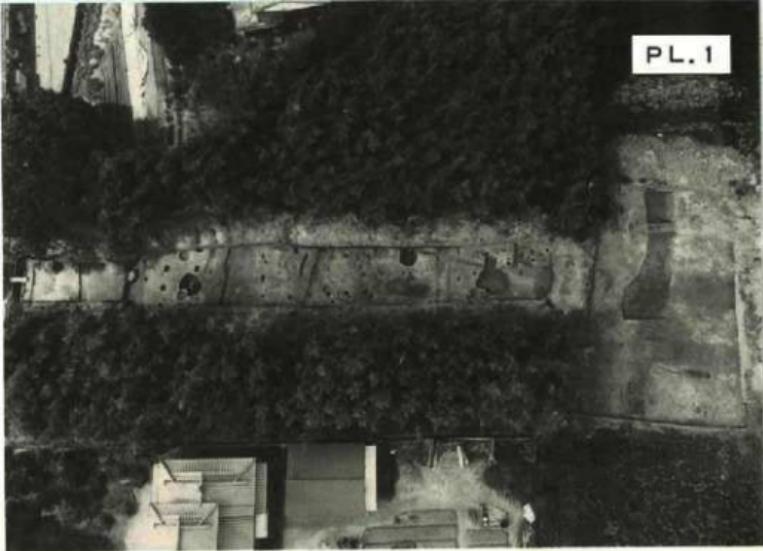
調査を行った部分の土壘は、現在、なだらかな逆「W」字上の断面を呈しているが、土層観察の結果、築造当時は薄鉢を二本並べたような断面であったことが推定される。また、土壘の北で検出されたSB-104は、土壘と同様に東西を軸とし、南北の対となる柱穴がないことから土壘の内側に巡らされていた棚あるいは木塀の柱穴の可能性もある。

坊所城の占有者とされている池田義幸は、龍造寺隆信(1529~'84)に仕え、「坊所氏」を初めて称え、行地350町を持ったと伝えられている。本県では戦国時代末のこの時代を龍造寺時代と呼ぶが、今回の調査で16世紀後半代の青花片が出土したことにより、文献資料の裏付けができたと言える。限られた範囲の調査であったため、現時点ではこれ以上のことはなにも明らかにできない。しかし、今回の調査で当時の遺構が比較的良好な状態で遺存していることが確認できた。今後、この地域の再開発に伴う調査例の増加を待てば、城の構成、周辺の中世集落との有機的関係など具体的なことを解明できるものと考えられる。

また、今回の調査で、古墳時代の土壙1基を検出したが、表土あるいは土墨版築層から須恵器など古代の遺物も少なからず出土しており、古墳時代から奈良・平安時代にかけての遺構がかなり存在したことが窺える。このようなことから、坊所丘陵の西に隣接する目連原丘陵上に目連原古墳群、塔の塚庵寺を残したとされる古代三根郡の国造、米多一族との関連も今後の課題と言える。

なお、今回の調査にご理解、ご協力をくださった日山不動産株式会社、古賀宅建不動産、地権者の中山 繁氏、西原 真氏には多大なるご迷惑をおかけした。末筆ながら、お礼とお詫びを申し上げます。

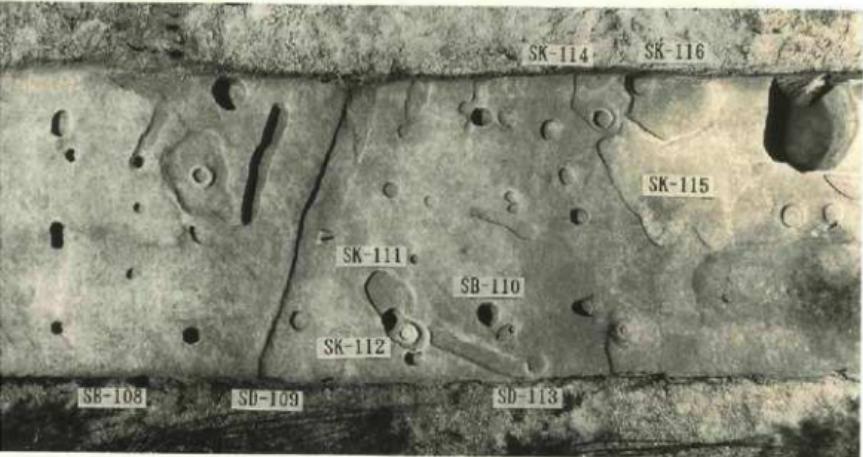
図 版



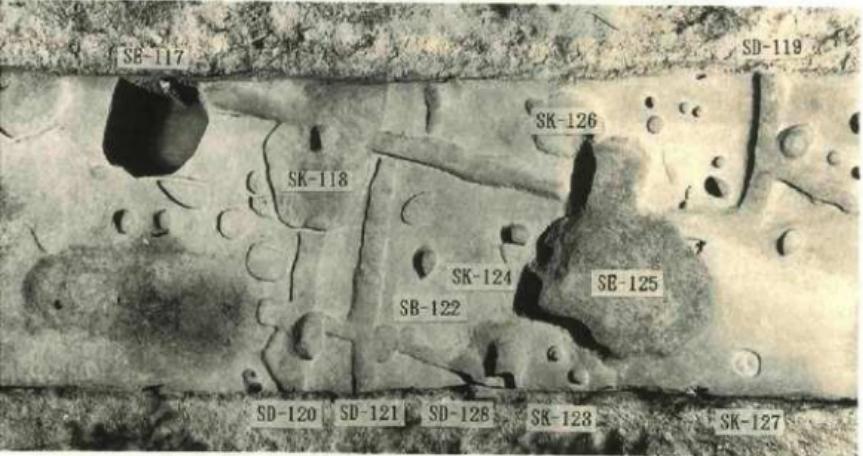
1 調査区全景（右が北）
2 土壌（西から）
3 土壌断面（調査区西壁）



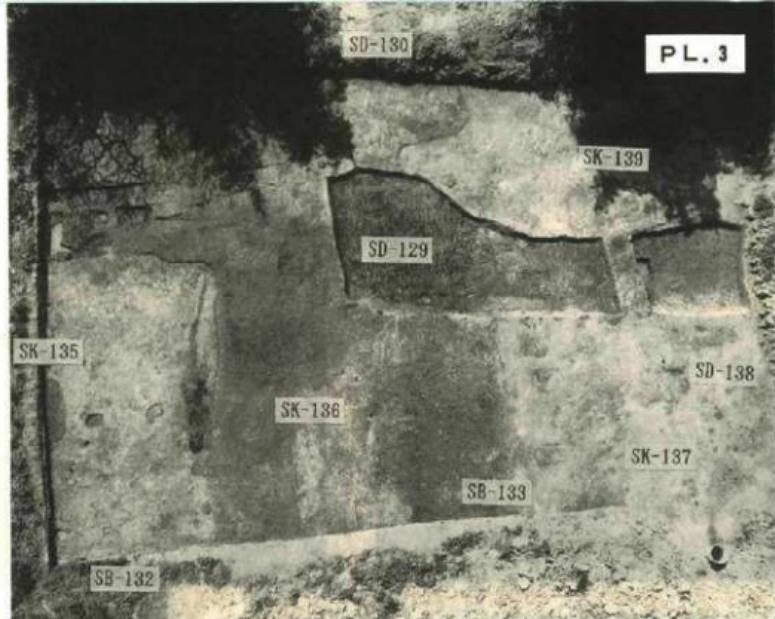
1



2



3



右ページ

- 1 道路部分(1) (右が北)
- 2 道路部分(2)
- 3 道路部分(3)



2

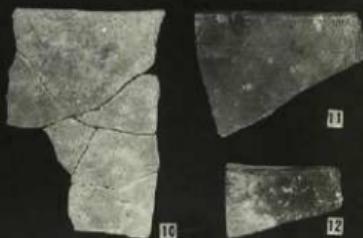


3

- 1 水田部分全景 (上が南)
- 2 SK-105 <南から>
- 3 SE-117 <西から>



1

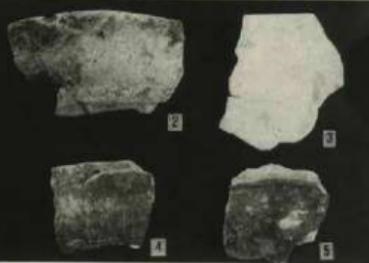


1

11

12

5



2

3

4

5

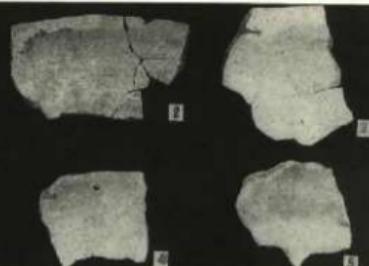
2



13

14

6



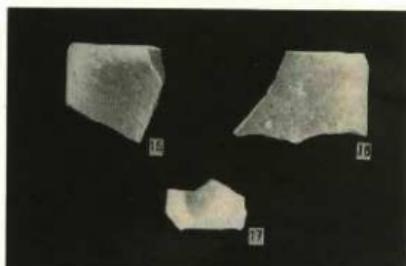
1

2

4

5

3



15

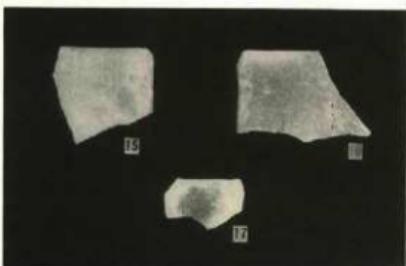
16

17

7



4



15

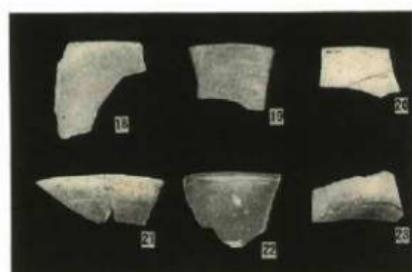
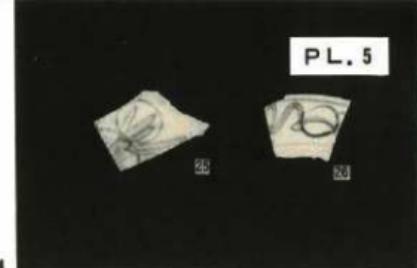
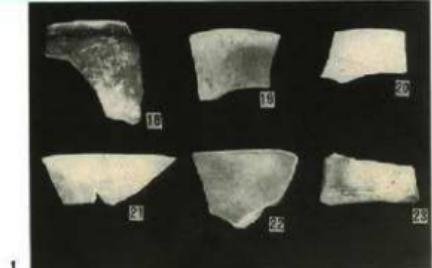
16

17

8

- 1 SK-105出土遗物
2 SD-102出土遗物
3 同 上
4 SD-107出土遗物

- 5 SD-107出土遗物
6 SK-115出土遗物
7 SE-117出土遗物
8 同 上



1 SD-129出土遺物

2 同 上

3 同 上

4 SE-125・SD-129出土遺物

5 同 上

上峰町文化財調査報告書第10集

坊 所 城 跡

平成4年2月24日印刷

平成4年2月28日発行

編集行
発行

上峰町教育委員会

佐賀県三養基郡上峰町坊所383-1

印 刷

(株)昭和堂印刷

佐賀県佐賀市神野西4-1-32

